

# 顕彰会通信

発行：堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也の三人の偉業を顕彰する会

「題字 鶴田知也」

事務所：〒824-0121 福岡県京都市都府みやこ町豊津1122-13 みやこ町歴史民俗博物館 TEL 0930-33-4666

印刷所：〒800-0315 福岡県京都市都府市都府町5-3 かわはら印刷所

## 記念講演会と記念出版

二〇二五年は、二つの記念講演会を行橋市中央公民館で開催しました。

一つは、二月一六日の坂本梧桐著『見果てぬ夢——堺利彦伝』（コールサク社）出版記念講演会です。小正路淑泰「わたくしの堺利彦研究」、坂本梧桐「堺利彦における『家庭』と社会主義（写真）」の講演がありました。坂本梧桐会員の『見果てぬ夢』については、田中英夫会員に書評をご執筆いただきました。

もう一つは、七月二〇日の葉山嘉樹先生没八〇年記念講演です。小正路淑泰「葉山嘉樹と荒畑寒村」、和田崇「葉山嘉樹と徳永直」の講演があり、和田崇会員（九州大学比較社会文化研究院准教授）には重厚な講演録を寄稿いただきました。

二つの記念講演会は、美夜古郷土史学校の講座の一環として開催したもので、近年稀にみる盛会となりました。堺利彦先生のマルクス主義文献に精通している中澤秀行会員が、長野県松本市より遠路参加されたことを特記したいと思います。多大なご支援をいただいた山内公二会員（美夜古郷土史学校事務局長）と豊津郷土史会、行橋京都地区日中友好協会の関係各位に心より感謝申し上げます。

本会の前身、堺利彦顕彰会が結成されたのは一九五六年一月ですので、二〇二六年に創立七〇周年を迎えます。そこで、それを記念し、小正路淑泰「葉山嘉樹と鶴田知也——錦陵人物誌」を福岡市の花乱社より刊行しました。第一部葉山嘉樹、第二部鶴田知也、第三部堺利彦、第四部錦陵人物誌の四部構成となりました。本書の購読拡大にご協力いただけると幸いです。（小正路淑泰）



坂本梧朗著『見果てぬ夢——堺利彦伝』

——小説家・詩人が描く長編伝記小説

顕彰会員 田中英夫



坂本梧朗氏は堺利彦の言う「恐喝の軍備拡張と詐欺的外交政略との外なき今日」とは、120年後の地球規模での経済格差や人種・男女差別が蔓延し、A1兵器で領土も民衆も破壊し合う21世紀でも同じことが言えると考えている。そして利彦のような家族や人間を大切にす社会主義を役立て、それを日本に応用しようとした思想・実践家たちの足跡を現代に問い掛けている。 鈴木比佐雄「解説」より

著者は堺の父母と同じ小倉生まれ、学生時代に社会主義にふれてから、同郷人と意識した堺を先達と仰ぐようになった。堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也の偉業を顕彰する会（以下三人の会と表記）会員である。

堺の伝記小説を書くこうと資料を集め始めたのは、教職を退くころだった。まず中央公論社が出版した『堺利彦伝』（中

公文庫）を读了、「本作のベース」としたとは、三人の会会員として自著を語った『大逆事件の真実を明らかにする会ニュース』第六四号（二〇二五年）にある（三人の会機関誌『顕彰会通信』第二七号にも掲載）。

「家庭から社会主義へというアプローチは堺独特のユニークなもの」だと認める著者は、ついで法律文化社による『堺利彦全集』全六巻にいどむ。読み進めることおよそ四年、執筆に七年余りを費やした。その間一年ほど他の小説を書いているとはいえ、十五年かけて世に問うた伝記小説である。

しかも描いたのは全生涯ではなく、幸徳秋水と平民社をおこすまでの前半生だった。およそ五十万字、原稿用紙なら千二百枚をこえ、四六判五百頁に及ぼんとする。親近感を抱いている「堺に感情移入して書くことができた」と、あとがきにある。

堺は出生地に近い豊津（現在福岡県京都郡みやこ町）で育った。一章はその「故郷」に始まり、十五章「見果てぬ夢」（書名）で終わる。各章内には「小見出し」をつけて、「読者が途中で投げ出さないように」工夫をこらした。提案したのは発行者であり編集者である鈴木比佐雄だ。解説「人間を大切にす堺利彦の社会主義を現代に問う」を寄せて、各章「小見出し」毎に著者のねらいを明らかにして伝えた。

そのねらいについて、出版後『毎日新聞』の取材にこたえた著者は、「世界情勢が不安定化している今こそ、平和を希求する声と思想は重要性を増している」と、最終章で堺が説いた場面をもって強調している（二月一三日付京築版）。

こうしてみると、著者は堺ならば何をどう考え、どう思い、どう語ったか、心のひだに迫りたいがために、評伝ではなく敢えて小説を選んだのが判る。評伝らしき章立て節立てをおこなったのが、その理由のひとつ、もうひとつは文献引用にある。堺が社会主義を学ぶ道すじをいねいに追うための文献引用が長きにわたると、やむなく縮めている。

なにしる、資料集めが元版にも及んでいるのだ。それによって、一九二六年に出版された改造社版『堺利彦伝』が附録とした「故郷の七日」を主要参考文献に挙げる事ができた。これは中公文庫版（初版一九七八年・改版二〇一〇年）が、附録にふれた元版自序稿末をも省いた紀行文だ。探索の確かさを証する。

もとは「青葉の旅」と題して一九一一年四月に、義兄堀紫山が記者をつとめる『二六新報』に寄稿したもので、『初期社会主義研究』第八号（特集冬の時代 一九九五年）所載山泉進「冬の時代」の若葉、青葉の旅―堺利彦の「大逆事件」遺家族慰問旅行」が、いきさつと旅程をくわしく紹介している。平民社の盟友幸徳秋水らが処刑されてから僅か数月、身をすくめて堪えるしかないときに出来ることは何かを考えて動いたのが堺である。

著者を支えたのは、三人の会による研究活動の積み重ねであろう。主要参考文献にもどれば、『初期社会主義研究』第一〇号（特集・堺利彦、一九九五年）、三人の会事務局長小正路淑泰編著『堺利彦 初期社会主義の思想圏』（論創社、二〇一六年）がある。これには、『パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』（講談社、二〇一〇年）を出版し

たノンフィクション作家黒岩比佐子の遺稿が収められている。三人の会主催「堺先生生誕一四〇年／大逆事件・売文社創設一〇〇年記念講演会」に向けて、黒岩が準備した講演原稿だ。急逝により登壇できなかったいきさつを伝えるのが、『初期社会主義研究』第二三号（二〇一一年）における、堀切利高「幻に終わった講演会―黒岩比佐子さん追悼」だ。堀切が黒岩と小正路をつないだと記されている。

平民社を結成してから後の続編執筆は読者の反応によって検討すると、著者は『西日本新聞』（一月一三日付）に抱負を語っている。さきにふれた『毎日新聞』の取材記事は、美夜古郷土史学校（小正路淑泰校長）が主催する講座紹介を兼ねたものだった。「堺利彦における「家庭」と社会主義」と題して臨み、「執筆を通じて感取した堺の人柄は、懐の深い、包容力のある、柔軟な性格の人というもので、「粘り強さ」が冬の時代を乗り切った、そう評したという（レジュメ「おわりに」）。もはや、続編へ踏みこむ意志のあらわれそのものだろう。（コールサク社 二〇二四年二月 五一―二頁 二〇〇〇円＋税）

（『初期社会主義研究』第三三号、二〇二五年より転載）

【編集部より】

田中英夫会員が、『平民社雑考』第二四〇第二六号（二〇二五年四月、八月、十二月）を刊行しました。宮崎民蔵を始めとする土地復権同志会（一九〇二年一月創立）に集う人々の履歴を明らかにした労作です。（小正路淑泰）

# 坂本清馬書簡を幸徳秋水を顕彰する会に寄贈

顕彰会事務局長 小正路 淑 泰

本誌前号既報のとおり、二〇二四年九月、幸徳秋水を顕彰する会の田中全事務局長より堺利彦の書幅「幸徳秋水獄中懷母」の高価なレプリカをみやこ町歴史民俗博物館に寄贈いただいた。

その返礼を兼ね、二〇二五年一月二四日、高知県四万十市の「幸徳秋水刑死二一四年・坂本清馬没五〇年記念合同墓前祭、「無実の碑」完成除幕式」に参列した。

坂本清馬「無実の碑」は、正福寺境内の幸徳秋水「非戦の碑」に隣接して建立され、碑文には、清馬が一九七〇年一月二四日の「大逆事件」第五九周年追悼記念集會に送った「坂本は必ず勝つ」で始まる激烈な「宣言」が刻まれた（山泉進「坂本清馬執筆の「再審請求書（草稿）」『明治大学教養論集』第五八一号、二〇二四年二月）。

墓前祭後、中村商工会館で記念講演會が開催され、山泉進「坂本清馬の人間像」、金子武嗣「幸徳秋水の再審請求の一〇年の軌跡」という非常に興味深い講演があった。

その折、古賀勇一氏（元三人顕彰会顧問）が大切の保管していた坂本清馬書簡（写真）を持参し、幸徳秋水を顕彰する会に寄贈した。坂本清馬書簡は、B4縦罫紙四枚、ペン書き、一九七三年二月一九日付で、宛名部には「堺利彦顕彰会事務局諸先生御中」と記されている。

幸徳先生と私との関係と書意  
 拝啓、遺事でも半ば式ことが大変おくりまして  
 失礼の極まりです  
 私は幸徳先生の「記念會館」が芝地に出来た事を  
 を心からよろこびやうと申す、中村でござる昭和  
 二十五年一月廿四日秋水先生刑死の日、第一回の  
 追善祭も執り行して以来、常に毎年二月廿四日  
 祭つてあり、去年一月廿四日にも例年の二倍の執行  
 さんらのでありましたが、また秋水會館を建立し  
 得ないので、私が無能なせい、芝地の未見の  
 同志諸先生に對して慚愧の至りです  
 今年一月の御祭には、私は福屋系（院中）で（たか）  
 純簡の祭文と、社会党中村給支部長に代議  
 辞してもらった、その中に、私は吾人の全労働協  
 議會の諸君が毎月一人百円だけ献金して頂き  
 たい、そうすれば五年後には、立派な秋水會館を建  
 てたことか、約束と書き置いたけれど、子供の日  
 の小便にも定かない、利己主義の連中は、何  
 するところの約束ない、利己主義の連中は、何  
 ます、酒を飲むといふは、今何は分りかた、何  
 増えなく申すのは、秋水會館を建てるため、  
 した百円をおこすと、何のいふ、私、昨年二月に  
 秋水先生の遺稿、何千代も、去年、先生を  
 側に建てました、諸君と加算し、約十、百円の  
 も、京都の、改訂、漢字、可老念の、會館の、献金  
 して、中村が、一、二、三、も、あ、り、ま、す  
 いろいろ事情で、私は、別、に

坂本清馬の1973年12月19日付堺利彦顕彰会事務局宛書簡。

堺利彦顕彰会は、この年一月二五日の堺利彦顕彰記念館の落成を清馬に報告するとともに、堺利彦と幸徳秋水に関する回顧録の執筆を依頼し、清馬はそれに応えてこの書簡を認めた。清馬が没する約一年前のことである。坂本清馬書簡からは、これまでしばしば指摘された幸徳秋水に対する思慕と反発とは異なる清馬像が浮かび上がってくる。

この坂本清馬書簡については、鎌田慧『残夢——大逆事件を生き抜いた坂本清馬の生涯』（金曜日、二〇一一年）のエピソードで部分的に引用された。「大分県豊津の堺利彦顕彰記念館」（傍点は引用者）などの誤記があり、三人顕彰会幹事の木村敏彦氏が、出版社と鎌田氏にそれを指摘したのだが、残念ながら講談社文庫版（二〇一五年）でも訂正されなかった。

幸徳秋水を顕彰する会副会長・左山遼氏の近著『星霜』（せいぶ印刷工房、二〇二五年）には、珠玉のエッセイ「回想の坂本清馬」が収録されている。

三人顕彰会元顧問の古賀勇一氏が、二〇二五年一月二日、逝去されました。古賀勇一氏は、一九五三年、豊津高校卒業後、九州電力に入社され、全九州電力労働組合執行委員長、全日本電力労働組合協議会議長、九州電力行橋営業所長の要職を歴任するとともに、堺利彦顕彰記念館の建設、葉山嘉樹文学碑と鶴田知也文学碑の建立など三人顕彰会の諸事業を牽引し、三人顕彰会の発展に多大な貢献をされました。

謹んでご冥福をお祈りします。



堺利彦先生33周忌碑前集會。福岡県豊津町(現みやこ町)。1966年1月23日。前列右が古賀勇一氏。

# 葉山嘉樹と徳永直

九州大学比較社会文化研究院准教授

和田 崇

## 一 はじめに

本稿は、二〇二五年七月二〇日に行橋市中央公民館で開催された「葉山嘉樹没八〇年記念講演会」で話した内容をまとめたものである。私の講演では、同じ「プロレタリア作家」と称される葉山嘉樹と徳永直について、「労働者」（「ゴリーキー」〈娼婦〉〈転向〉）という四つのキーワードを用いて、二人の共通点や相違点について解説した。

葉山と徳永は、日本の高度経済長期に多数出版された文学選集で、同時に収録されることが何度かあった。

・『日本現代文学全集73葉山嘉樹・徳永直・黒島伝治集』（講談社、一九六四年）

・『現代文学大系37葉山嘉樹・小林多喜二・徳永直集』（筑摩書房、一九六六年）

・『日本の文学39葉山嘉樹・小林多喜二・徳永直』（中央公論社、一九七〇年）

右に示した三冊が、一九六〇年代から七〇年代にかけて刊行された文学選集のうち、葉山と徳永を同時に収録したものである。ただし、このうち二番目と三番目は小林多喜二と一緒に収録されているのに対して、一番目は瀬戸内海の小豆島出身の黒島伝治と一緒に収録されている。

これらには明確な編集方針の違いがある。まず、多喜二と

一緒に収録された二冊は、大正末期に葉山が『海に生くる人々』を発表することでプロレタリア文学の黎明期に入り、昭和期になって葉山に影響を受けた多喜二の『蟹工船』や徳永の『太陽のない街』が登場することでプロレタリア文学の全盛期を迎えたという認識のもとで編集がなされている。一方で、黒島と一緒に収録された選集には、別の意図が含まれていた。

この葉山・徳永・黒島を併録した講談社版の選集の解説において、戦後を代表する文芸評論家の小田切秀雄は、次のように述べている。

この巻の三人は、葉山嘉樹がもと海員、徳永直がもと印刷工、黒島伝治がもと醬油工場労働者・小経営事務員、というふう<sup>1</sup>にそれぞれ下積みの労働者から作家になったひとたちである。しかもかれらは、労働者階級としての自覚・解放要求から労働者自身の生活と闘争をえがくことによつて、それまで日本近代文学史上に見られなかつたま<sup>2</sup>つた<sup>3</sup>たく新しい性質の作品を創り出したのであつた。

注1

つまり、先述の多喜二を交えたプロレタリア文学の発展史という編集意図とは異なり、この選集は、「労働者」出身の作家という共通点を意識して編集がなされていたのである。この小田切の評価を出発点として葉山と徳永を比較していくが、一方で、二人を単純に「労働者」出身と一括りにしてよいのかという疑問も投げかけてみたい。葉山と徳永とは、「労働者」出身に代表されるような共通点がありつつも違いもある、そうした視点で二人の関係性を考察していく。

## 二 人物史的な共通点と相違点

まず、年譜<sup>3)</sup>を参考に二人の生い立ちを比較してみる。

葉山嘉樹は一八九四(明治二七)年生まれ、徳永直は一八九九年生まれであり、五歳違いである。葉山は福岡県京都郡豊津村(現・みやこ町)の出身で、一方の徳永は、熊本県飽託郡(現・熊本市)花園村に生まれ、その後同郡黒髪村に移住した。葉山家は士族の家系で、父親は京都仲津郡の郡長を務めていた。一方の徳永家はいわゆる貧農で、父親は日露戦争に出征して負傷し、その恩賜金で駄馬を買って荷馬車引きをしていた。しかし、なかなか事業はうまくいかず、徳永は母親と一緒に竹箸を作って市場に売りに行ったり、父親の荷馬車引きを弟と一緒に手伝ったりと、家計を助けるために幼少期の頃から働いていた。大きく括ると二人とも九州出身という共通点はあるが、家柄の違いは一目瞭然である。

そして、注目したいのが学歴の違いである。葉山は豊津小学校、豊津高等小学校、豊津中学校卒業と順調に学歴を重ね、最後は学費未納により除籍となるが、早稲田大学高等予科文科にも一時在籍した。一方の徳永は、黒髪尋常小学校しか卒業していない。しかも、この卒業にはいわくがあり、徳永は五年生の終わりから働きに出始め、六年次からは通学をしていなかった。本人の回想によると、担任教師の厚意で卒業扱いとなったらしい。このように、葉山は大学中退、それに対して徳永は小学校を見なし卒業という大きな学歴差がある。

そんな二人は、葉山が大学中退後に海員や学校事務員、セメント会社の工務係や新聞記者として働き、徳永が小学校の中途から米屋の丁稚や煙草専売局、発電所や印刷所で働くな

ど、ともに労働経験を積み重ね、やがてプロレタリア作家となった。しかし、同じプロレタリア作家で、しかも同じ九州出身であるからといって、二人が深い交流をすることはなかった。なぜなら、当時のプロレタリア文学運動は大きく二つの派閥に分かれており、ごく簡単に説明すると、葉山は合法無産政党を支持する『文芸戦線』(文戦派・労農派)、徳永は非法無産政党(共産党)を支持する『戦旗』(戦旗派・ナツプ派)と、それぞれ対立する組織に属したからである。

二人がようやく関わりを持つようになるのは、プロレタリア文学運動が事実上崩壊した後の一九三五(昭和一〇)年頃のこと、当時、徳永が雑誌『文学評論』の編集顧問を務めており、その雑誌に関する業務で徳永が葉山と会うことがあった。

・一九三五年五月一七日・葉山が短篇集『今日様』(ナウカ社)の出版打ち合わせのために上京した際、徳永直、島木健作、森山啓、渡辺順三、小堀甚二、平林たい子らと会い、雑談する。<sup>注3)</sup>

・一九三六年六月・渡辺順三の家で徳永と渡辺が『文学評論』編集の相談をしていたところ、葉山が訪ねてきて、ゴリーキーの死に対して沈痛な表情をした。<sup>注4)</sup>

・一九四〇年三月一日・徳永が葉山の短篇集『濁流』(新潮社、一九四〇年)の「解説」を執筆(のち『子を護る』として一九四二年に改版された際は同「解説」を改訂再録)し、葉山を庶民の生活に根ざした作家であると評価。

・一九四二年暮れ〜一九四三年早春頃：徳永が農民文学懇話会の例会に出席する際に、丸の内の街路で偶然に葉山と会い、間宮茂輔も交えて三人で会に同道し、流会となったた

め一緒に飲みに行く。<sup>注5</sup>

ただし、右に整理したように、葉山の生前に徳永と直接ないし間接的な交流をした記録は、文献からはわずかしかな確認できない。そのため、両者の関係性については、もっぱら葉山の死後に書かれた徳永の回想に依拠するしかなく、本稿はある意味で徳永による葉山嘉樹論の紹介文とも言える。

## 二一 労働者に憧れた知識人と知識人に近づいた労働者

徳永直が葉山嘉樹をどのように見ていたのかを説明する際に、ぜひ確認しておきたいのが、葉山を〈労働者〉に分類することへの徳永の違和感である。

豊津中学を卒業。と同時に、父も失業した。文学志望だったので、早稲田の文科に入れてくれと、父に頼んだが、学費が無いと答へられた。「ぢや、家を売ればいゝぢや無いか」と云つた。家は確か四百円かで売れた。「これ丈けつか無いぞ」と云つて、四百円全部一度に渡された。早稲田に籍を置いたが、学校には行かないで、二三ヶ月の間に全部の金を、浪費してしまつた。<sup>注6</sup>

葉山の自作年譜から引用した右の逸話に対し、徳永は次のように批判的な見解を示している。

葉山という作家は労働者であるのか、インテリゲンチヤなのか、今日までではつきりしないでいる。「中略」少くとも彼の生いたちは小市民であつた。「中略」四〇〇円を使い果たしたことに触れて「これは労働者にはなかなかできない芸当である。「中略」労働者にもずいぶんずぼらなのや、大胆な者があるけれど、そういうふうなつかいかたはしな

い。もつと切迫した事情ではありうるけれど、考ええられない。葉山の当時の事情では、労働者にはないことだ。<sup>注7</sup>

葉山が早稲田に入学したのは一九二二(大正元)年のことだ。「日雇労働者の賃金」が日給六〇銭<sup>注8</sup>だった時代である。明確な貨幣価値の算出は難しいが、仮に一元を約一万円で計算すると、約四〇〇万円もの大金を、葉山は一年も経たないうちに使い切つたことになる。もちろん、徳永が付言しているように「労働者にもずいぶんずぼらなのや、大胆な者」がいるのもたしかである。しかし、徳永は自身の経験から、現実の労働者は生活不安を抱いており、普通はそのような思い切つたお金の使い方ができないことを指摘しているのである。

また、徳永は知らなかつたことだが、そもそも葉山が自作年譜に記したこの逸話自体が、実は虚偽である。葉山嘉樹研究の先駆者である浦西和彦の丹念な調査によつて、「土地登記簿」に基づき、葉山の父親が宅地を売つたのは、早稲田中退後の一九一五年であつたことが判明している<sup>注9</sup>。葉山は失業で窮迫した家庭のなけなしの金を強奪したのではなく、親の安定した収入を原資として進学したのであつた。

これらの逸話と事実には、葉山の〈労働者〉性をめぐる二重の逆説が含まれている。まず、葉山が嘘をついたという事実からは、小倉藩の藩校の流れをくむ名門の旧制豊津中学校の出身(文化資本の相続者)ではあるが、親の経済力(経済資本の相続者)を覆い隠すことで、自身には〈労働者〉になる素質があつたことを強調したい意図がうかがえる。また、そうして創り出された逸話は、結局は知的エリートによつて戯画化された〈労働者〉のイメージであつて、それを生粋の

労働者である徳永は鋭く指摘したのであった。

ただし、徳永の批評が正しいとも限らない。徳永の想定する〈労働者〉は、あくまで工場労働の経験に基づくものである。そこからは、葉山が経験した海員のような肉体労働を〈労働者〉のイメージから排除している趣がある。

たとえば徳永は、葉山も自分もデビュー前に文戦派の青野季吉や金子洋文に小説を読んでもらった共通点があり、もしかしたら同じグループに所属した可能性に触れながら、しかし、「工場労働者気質からみれば、よくいえばあどけなく、わるくいえばならず者みたいで、『文戦派』の労働者気質なるものは魅力がなく」感じた<sup>注10</sup>と述べている。つまり、文戦派の肉体労働者気質は、自身の工場労働者気質とは合わず、仮に文戦派に所属していたとしても、結局は途中で愛想をつかしたというわけである。ここには、工場労働者からある意味で〈知識人〉の仲間入りをした作家の、肉体労働者蔑視の視点が混じっている。

葉山は経済資本と文化資本の両方を有した小市民階級であったにもかかわらず、あえて自ら労働者階級に飛び込んでいった。一方の徳永は貧農の家庭で育って労働経験を積み、労働者階級から知的階級へ移行した。作家になって以降も葉山は、一九三四年に長野県の伊那地方にある三信鉄道の工事現場で労働に従事したが、徳永は職業作家になって以降、一度も専門の労働者に戻ることはなかった。ここには、もともとはエリートコースを歩んでいたが、労働者へのシンパシーから自らの身体や心をそれに同化していった作家と、労働者出身ではあるが、知識を身につけて〈労働者〉イメージを相対化

する視点を身につけた作家との違いが表れているのである。

こうした二人のあり方を、私は〈労働者に憧れた知識人〉と〈知識人に近づいた労働者〉と定義しておきたい。

## 二―二 マクシム・ゴリキーの愛好者

前節で指摘した葉山嘉樹と徳永直の〈労働者〉性をめぐる違いは、二人が愛したロシアの文豪マクシム・ゴリキーへの態度にも表れている。

二人の相違点を確認する前に、まずは、葉山がどれだけゴリキーを好きだったのか、徳永の回想で語られた逸話を紹介したい。

葉山が、ゴリキーにどれくらい影響をうけているか、私にはわかりかねるが、非常に尊敬していたことは、事実である。〔中略〕一九三六年六月、ゴリキーが死んだとき、「文学評論」は、その追悼号を出した。そのことで、編輯者のW君（\*渡辺順三―引用者注）と相談していたじぶん、ある夜、ひよつこり葉山が、世田谷のW君の家へきた。〔中略〕「死んだねエ」／ひそかな、しずんだ、しかしふとい声で、私の顔をみつめて、いきなり云った。〔中略〕「死んだねエ」／と、彼の云った声は、ただそれだけで、沈痛なものであった。<sup>注11</sup>

右の引用は、先述した二人にわずかな接点があった頃の逸話である。ちょうどゴリキーが亡くなったときに、徳永は葉山と会い、そのとき葉山は「死んだねエ」と「ひそかな、しずんだ、しかしふとい声」で徳永の顔を見つめて言い、そこに徳永は葉山の「沈痛なもの」を看取した。

もちろん、葉山自身もゴリキーを愛好していたことを書いてある。よく引用される「文学的自叙伝」では、ゴリキーの短篇集を読んでマドロス（海員）になりたくなつたとか、短篇小説「チエルカツシ」のような生活をしたいと願つていたことが記されている<sup>注12</sup>。「チエルカツシ」は、港町でサンパン（小型の交通船）を漕ぐなどして税関の目を盗みながら大金を稼ぐ泥棒の話で、その自由気ままな港湾での生活に葉山は憧れたのである。

また、葉山は講演録において、ゴリキーの戯曲「どん底」の中の「地球から半哩離れたところにユートピアがある」という言葉に感銘を受けたとも述べている<sup>注13</sup>。「どん底」は、帝政ロシア時代の木賃宿（貧しい人々が共同生活をしている安宿）を舞台に、苦しい生活をしながらもユニークな宿の住人の人間模様を描いた戯曲で、葉山が引用しているのは、第四幕で木賃宿を出て行くかどうかと皆が話をしている中で、サーチンという登場人物が話すセリフである。正確には「ユートピア」ではなく体を癒す「病院」といった趣旨で訳されることが多く、葉山の思い違いもあるのかもしれないが、いずれにせよ、おそらく葉山は、上京して早稲田に進学してもうだつたのあがらない自身の生活を「どん底」の登場人物たちに重ね、「チエルカツシ」のように港湾で生活を送るユートピアを夢想したのであろう。

一方で、徳永もゴリキーは好きな作家の一人であった。徳永の中期（昭和一〇年頃）から晩年に至るまでは、彼が最愛した作家と言つても過言ではない。ただし、徳永のゴリキーへの向き合い方は、葉山のそれとは大きく異なっている。端的に言うると、葉山は初期の「チエルカツシ」や「どん底」に見られる

放浪生活の奔放さやその美学を描いた作品に強い憧れを抱いたのに対し、徳永は中期頃に書かれた自伝的小説を愛好していた。徳永が自伝的小説に注目した理由は、ゴリキーの『私の大学』に対する彼の感想で象徴的に述べられている。

ゴルキーが、己れを「民衆の継子」だと感じ、そう書いてゐることを筆者は理解出来る。ロシアと日本の事情はいくらか違ふか知れないが、農村における細民階級、小作土地もたず住む家もなく、奴隸的な放浪生活者はみなそう感じたであらう。「私の大学」で書いているやうに、彼らには「愚かなる大衆」「愚かなる百姓」でさへが、「旦那」であつたのだ！ 筆者の父も母も「民衆の継子」であつたし、十三歳のとき工場に入るまでは、筆者もそうであつたのだ――。<sup>注14</sup>

「筆者は理解出来る」や「筆者もそうであつた」といった文言に表れているように、徳永はゴリキーの生涯に自身の過去を重ねている。ゴリキーは一〇歳頃から靴屋の丁稚、汽船の皿洗いなどをして働き、労働をしながら教養を身につけた作家であつた。そして、徳永も同じやうに、幼少期から働いた経験を持つ労働者出身の作家である。徳永は、この貧しい労働者出身という同じ境遇に共鳴し、その経験を基にしたゴリキーの自伝的小説に共鳴したのである。

ゴリキーの作品にユートピアを夢想した葉山と自身の過去を重ねた徳永の態度の違いは、これもまた、先に私が提起した（労働者に憧れた知識人）と（知識人に近づいた労働者）という定義と結びつけることができるだろう。

### 三 作品上の類似点

さて、ここまで葉山嘉樹と徳永直の人物史に関する比較をしてきたので、後半は二人の作品を比較していきたい。

#### 三―一 娼婦（淫売婦）へのまなざし

二人の作品の共通点としてまず挙げたいのが、〈娼婦〉や〈淫売婦〉と呼ばれ当時は蔑まれた売春をする女性たちに対して、仲間意識や同情の視点を向けていることである。ただし断つておくと、葉山嘉樹は多少家庭を顧みない一面があり、何度か再婚しており、徳永直も、愛妻家ではあったが、最初の妻を戦時中に亡くした後は何度か再婚をし、その都度再婚相手とのトラブルを起こした。このように、二人とも女性に関してはゴシップ的な悪評もあるが、あくまで作品だけを読むと、プロレタリア作家らしい特筆すべき女性へのまなざしが見えてくる。

たとえば、葉山の代表作『海に生くる人々』では、次のように語られている。

彼等（\*労働者―引用者注）は女性を慕った。そして、それが娼婦と淫売婦とに限られてあつた。女の中でも最も弱い階級と、男の中で最も虐げられた階級との間には、ブルジョアがそれ等に対する時と違つて、どこかに共通な打ち解けた点があつた。それは共同の敵を持つてゐる味方同志であつた。／＼表面的の關係は買ひ、売つた、ことになつても、彼等に極めて僅に残された人間性が、それを、人間的に引き戻す機会もあり得た。そして彼等は

どちらも、プロレタリアであつた。<sup>注15</sup>

この場面（第一九節）は、後に「港町の女」というタイトル

で切り取られ、短篇小説としても再発表されており、この引用の後に、ドストエフスキーの『罪と罰』のソーニヤを思わせる崇高な理念を持った娼婦が登場し、立身出世をすることが無数の人間を虐げる側に回るといふ警告を発す。こうした視点が葉山の名作「淫売婦」を生み出したことは言うまでもない。

そして、この『海に生くる人々』で語られた娼婦や淫売婦と労働者は「共同の敵」を持つてゐる「味方同志」と似たような認識を、徳永も代表作『太陽のない街』で示している。『太陽のない街』の「対峙する陣営 Ⅲ 婦人部会」の場面で、労働組合の婦人部長をはじめとする一派が、組合員のきみが「淫売」をしているとの嫌疑をかけて批判したのに対し、ヒロインの高枝が、次のように反論し、婦人部長たちの認識を弾劾した。

皆さん、妾は、部長の貞操論を弾劾します。部長の貞操論は、吾々の同志を陥し入れやうとしてゐるのです。「中

略」部長は、妾達の最も同情すべき同志、きみちやんを、ブルジョア的な貞操論とやらで、吾々の仲間から放り出さうとしたのだ。<sup>注16</sup>

ここで高枝は、きみは売春をしているか否かにかかわらず同じ労働者の同志であり、それを貞操論で批判することは、結果的には自分たちを貧しい境遇に追いやってゐるブルジョアの味方をするのだと指摘してゐるのである。

さらに、娼婦といえば、葉山と徳永は同じ九州出身ということもあつてか、ともに〈からゆきさん〉の悲劇を描いてゐることも見逃せない。森崎和江の著作で有名な〈からゆきさん〉は、戦前の中国大陸や東南アジアを中心とした新興植民地に、日本から主に売春を稼業として出稼ぎに行った女性た

ちのことである。島原や天草の出身者が多かったことから「島原女」や「天草女」といった通称で呼ばれることもあった。

先に徳永の作品から紹介すると、彼はその通称を用いた「島原女」という短篇小説を書いている。この小説は、島原半島の漁師部落で水夫を相手に私娼をしながら家計を支えているおしまという少女が主人公で、ある日、彼女は幼なじみに海外で出稼ぎする話を持ちかけられ、貧しさから脱したいという思いから、ハルピンに行くことを決意する。

船底の三等室はいっぱいで、呼吸がつまりさうだった。

〔中略〕おしまは、ぐツぐツと咽喉を鳴らしながら泳いでゐた。しめた硝子の丸窓に、くらい波がかぶさつた〔中略〕波の色がかはつてきた。どツとそれをみつめながらおしまは歯をくひしばつてゐた。――まるで強敵のまへに身構えてゐる豹のやうに、不安と恐怖とで黒い瞳をかがやかせながら――。注17

右に引用したのは、「島原女」の結末に近い部分である。ここには、「呼吸がつまりさうな「船底の三等室」に「いっぱい」で「積み込まれ、「泳え」て「不安と恐怖」を抱きながら海外に売られていくおしまの姿が描かれているのである。

実は、このおしまのような「からゆきさん」が行き着く先を、葉山の『海に生くる人々』では暗示しているような描写がある。それは、第三〇節で水夫の波田が、一九一〇年代に起きたチエンロツカカの悲劇を思い出す場面である。チエンロツカカとは、錨いかりに繋がれた鎖（チエン）を格納しておくスペースのことで、大きな船を停泊させるためには、重い錨を海に下ろす必要があり、それを繋ぎとめる鎖も相当な重量がある

上、錨を下ろすときには非常に早いスピードで鎖が巻き上がる。当然そんな所に人が入るのは危険なのだが、だからこそ検査が及ばない場所として、売春のため無許可で海外に渡航する密航婦たちの隠れ場所としては、しばしば利用された。

密航婦はどんな状態でも、我慢しなければならなかった。哀れな彼女等は、フォアピーク（\*船首最先端の狭い部屋―引用者注）の中で、窒息して死んでしまつた程にも、我慢しなければならなかった、彼女等はビール箱の中で五百夜も、云ひやうのない状態で、半死のどたん場まで我慢しなければならなかった。〔中略〕ボースン（\*甲板長―引用者注）は、何と考へ違ひしたものが、次のシンガポアで、有頂天になり過ぎてゐて、密航婦を、チエンロツカカから出すことを忘れてしまつた。／＼そこで状態は、投錨の際に一度に悪化した。鎖の各片、人肉の各片、骨の各片、蓆の破片ともつれつ、くんづして、チエンホールから、或は虚空へ、或は鎖と共に海へ、十三人の密航婦を分解、粉碎して、はね飛ばしてしまつた。船首甲板に立ち並んでゐたボースン、大工は勿論、水夫、チーフメイツ等は肉漿を浴びた。注18

「島原女」のおしまがゐるのは「船底の三等室」であるため、チエンロツカカよりも危険性は低いが、それでも狭い空間に何人もの女性たちが押し込まれたという点では劣悪な環境にあった。「からゆきさん」たちが船の中では物のようになわかれ、命さえも軽視されていた様子が、二人の作品を並べることで鮮明に浮かび上がってくるのである。

# る 護 を 子

著 樹 嘉 山 葉

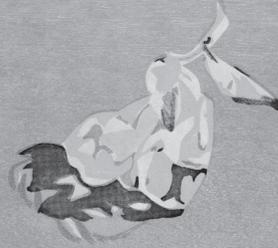


集 選 作 名 和 昭

新  
潮  
社  
版

# 流 濁

著 樹 嘉 山 葉



集 選 作 名 和 昭

新  
潮  
社  
版

## 三十二 転向の時代の作品

次に、今度は二人の〈転向〉の時代の作品を比較する。〈転向〉というのは、評論家の鶴見俊輔の言葉を借りれば「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」<sup>注19</sup>のことである。ただし、戦前の国家権力は非常に巧妙であったため、さまざまな圧力をかけることで作家たちの表現の自由を制限していき、あくまで自発的に〈転向〉したかのよう仕向けた。

徳永直の場合は、一九三七（昭和一二）年一月二十五日の『太陽のない街』絶版宣言<sup>注20</sup>が彼の〈転向〉の象徴とされている。出世作や代表作を絶版にするというのは屈辱的な行為であるはずなのに、時局に合わないという理由で徳永は自らそれを宣言した。この背景には、内務省がジャーナリズムに対して、問題のある作家の作品を掲載するメディアには出版許可を出さないという圧力をかけていたことがあり、実際の直後に、中野重治や宮本百合子といったプロレタリア作家が事実上の執筆禁止の処分を受けた。

一方、葉山嘉樹の方は、彼が属した文戦派が合法無産政党を支持していたこともあり、非合法の共産党ほど過激ではないという理由で取り締まりはやや緩い傾向にあった。それでもやはり、次第に弾圧が厳しくなり、彼もまた〈転向〉をせざるをえなくなつた。たとえば、一九四〇年に新潮社から〈昭和名作選集〉の一冊として『濁流』（写真）という葉山の短篇集が刊行されたが、二年後の一九四二年に改版された際には、書名も『子を護る』（写真）に改題され、表題作の「濁流」が「子を護る」に差し替えられた。「濁流」（あらずじは後述する）は、多少社会批判が描かれた小説であったが、「子

を護る」は、農村で暮らす作家の「私」が、周囲の農家となくじめていない不安や、「新体制」に応じる作家活動をできていないことへの焦燥といったものを吐露する中で、娘が肺炎になりかけてしまい、親切な町医者や看病を手伝ってくれる隣家の人々の愛情に接するという内容で、無難な生活小説であった。葉山は差し替えの理由を、「今度思ふところがあつて」<sup>注21</sup>と、たった一言で済ませているが、この一言からは言論統制が敷かれた当時の重い空気が伝わってくる。

こうした表現の自由が著しく制限された時代の中で、葉山と徳永は〈転向〉をしながらも粘り強く作家活動を続けた。作品を書き続けた最大の理由は、もちろん生活のためであつたが、それでも彼らなりの矜持は作品に滲み出ていた。

そんな〈転向〉の時代における葉山と徳永の作品の共通点を探る上で、『葉山嘉樹全集』に収録された小田切秀雄の解説にヒントを得たい。小田切は、葉山の〈転向〉期の作品を解説するにあたり、徳永の作品に二度言及している。

葉山がこの作品（\*『海と山』—引用者注）に着手する直前に、徳永直は『最初の記憶』（昭和十三年一月『新潮』）というすぐれた短篇を書いて、幼かつたころの自身の最初の労働の経験を描いたが、この『海と山』<sup>注22</sup>は葉山嘉樹が奔放に多彩に描きだした労働の経験の

『最初の記憶』だつたのである。<sup>注22</sup>

『海と山』は、葉山がカルカッタ航路の船員となつて働いた初めての労働経験をモデルにした長篇小説で、インドまで「海」を渡つてチベットの「山」を見たいという、そうした彼の青年期の憧れがタイトルに投影されている。その中

では、「これは俺が一人前になりかけた証拠なんだ。」「人間になるんだ。つまり今まではまだ人間並ではなかつたんだ。」<sup>注23</sup>と、労働者としての一步を踏み出すに当たつての熱い思いが語られている。

一方で、徳永の『最初の記憶』は、本稿第二節の冒頭で述べた竹箸作りや荷馬車引きをした彼の幼少期の労働経験をモデルにした短篇小説で、その結末部では、「私たちはもつと労働について語られなければならない。」と提起され、「労働のもつ内容は」「人類を益するものである」<sup>注24</sup>と締め括られる。葉山も徳永とともに〈労働〉が人間の本質であるという共通認識を抱いていることがわかる。

小田切はもう一つ、葉山が〈転向〉の時期に「どこまでも追いつめられてゐる大衆の、最後に残つた生命力までも、何故とも知れず奪つて行かうとする何物かには、私は反抗しいではゐられ」ず、「私の能力と云ふものは、大衆と共に、不平を洩すことにある」と述べていたことに触れた上で、その矜持が、徳永の短篇小説「八年制」に通じるところがある<sup>注25</sup>と指摘している。

徳永の「八年制」（『日本評論』一九三七年六月号）は、職工から作家になつた鷲尾が、当時議論されていた「義務教育八年延長案」の新聞記事を読んで腹を立てる場面から始まる。彼は、延長に伴つて経済的負担が増す家庭があること、東北の農村と東京の都会との教育格差などに思いをめぐらし、さらに、かつて職工仲間であつた石村の次男で、まだ小学校を出たばかりの栄作が職を探しているのを見て、耐えがたい気持ちになる。つまり、政府が良かれと思つて講じる施策によつて翻弄される

下層の人々がおり、その苦しみに焦点を当てた小説である。

そして、葉山もまた「大衆と共に、不平を洩す」ような小説を書いた。差し替えて削除された小説として先に紹介した短篇小説「濁流」〔中央公論一九三六年七月号〕は、天龍川の河畔にある鉄道工事前の材料の採取場にある飯場が、日本中どこにもないような強烈な悪臭のする米が出回るなど、劣悪な環境にあることを告発している。また、天龍川で大洪水が発生し、濁流によつて飯場や工事場のモーターなどが流されるなど、自然の脅威の前に難を逃れた坑夫たちが、救援隊を組織して協力し、何とか自分たちの生活を守ろうとする様も描かれている。

先述したとおり、次第に表現の自由は制限され、政府の施策を批判したり過酷な労働の現場を告発したりするような小説も描かれなくなる。しかし、二人はぎりぎりまで、庶民生活や労働者の立場に立った小説を描いていたのである。

#### 四 おわりに

以上、葉山嘉樹と徳永直の共通点や相違点を解説してきた。二人はともに九州出身で労働経験のあるプロレタリア作家である一方で、彼らの抱く〈労働者〉像の差異が、肉体労働者と工場労働者の立場、ゴリーキー受容の仕方などに顕著に表れていた。また、〈娼婦〉の描き方や〈転向〉の時代の作風などにおいて、作品の上ではいくつかの共通点があることも確認できた。

つづめていえば、私はこう思っている。葉山はもともと小市民的インテリゲンチヤである。そこから『海に生くる人々』まで前進した。この前進した時期は、彼の生

涯の半ば以上に達していて、『海に生くる人々』が発行されたとき、卅一歳であった。そして彼が労働派の立場にとどまったとき、さらに前進することがなくなつて、後期にはむしろ後退した。それにもかかわらず、虐げられる者の立場・虐げられる者の反抗、という点では（ときに虐げられる者のおちいりやすい愚かさをふくめて）頑固に守り透した。<sup>注26</sup>

実のところ、本稿は右に引用した徳永の葉山論に長文の注釈を付けたに過ぎない。徳永は、葉山が代表作『海に生くる人々』を頂点にあとは後退していったが、それでも「虐げられる者の立場、虐げられる者の反抗」は描き続けたと評価した。

葉山嘉樹ファンからすると納得のいかない評価かもしれないが、興味深いのは、徳永自身も、後世の評論家から似たような評価を受けていることである。〈労働者作家〉としての徳永直の評価を試みた判沢弘の評論で、徳永は次のように評されている。

彼は『太陽のない街』のごとき労働階級の闘争を積極的に描き出す地点から、「小市民的生活地域にいて、工場地帯や農村との間をおよび腰的に結びつけようとする」ところの「小市民的生活に後退していった」（徳永の「絶筆」一九五八年一月二十三日代記より）のであった。この水鳥の羽音に驚き、あわただしく浮足だつて後退をはじめつつも、それでもなお或る地点で踏みとどまつて抵抗せんとする姿勢に、われわれは戦時における徳永の精神構造を端的にうかがうことができよう。<sup>注27</sup>

何度か引用した小田切秀雄が葉山と徳永の類似点を捉えて

いたように、おそらく徳永は、葉山を通して自分自身と重なるものを感じ取っていたのではないだろうか。そして、その感性が、彼が葉山に下した評価と徳永自身に対する後の評価との合わせ鏡のような一致を生んだのかもしれない。

## 注

- 1 小田切秀雄「葉山嘉樹・徳永直・黒島伝治入門」（『日本現代文学全集73葉山嘉樹・徳永直・黒島伝治集』講談社、一九六四年）三八六頁。
- 2 基本事項の確認として、浦西和彦編『人物書誌大系16葉山嘉樹』（日外アソシエーツ、一九八七年）および同編『人物書誌大系1徳永直』（日外アソシエーツ、一九八二年）収録の「年譜」を参考にした。
- 3 『葉山嘉樹日記』（筑摩書房、一九七一年）二六九頁、葉山嘉樹「書簡（広野八郎宛、昭和十年五月二十日）」（『葉山嘉樹全集 第六卷』筑摩書房、一九七六年）四六七頁。
- 4 徳永直「葉山嘉樹の記憶」（『芸芸往来』一九四九年三月号）一〇三〜一〇四頁、徳永直「葉山嘉樹の位置」プロレタリア文学の開拓者（初出：『文学』一九五三年六月号／引用：『日本プロレタリア文学案内（2）』三一書房、一九五五年）一一頁。
- 5 徳永直「葉山嘉樹の記憶」（注4前掲）一〇六頁、徳永直「葉山嘉樹の位置」（注4前掲）一一頁。
- 6 葉山嘉樹「年譜」（『葉山嘉樹全集』改造社、一九三三年）五一〜九頁。
- 7 徳永直「葉山嘉樹の位置」（注4前掲）一三〜一四頁。
- 8 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』（朝日新聞社、一九八八年）一七三頁。
- 9 浦西和彦「浦西和彦 著述と書誌 第三卷：年譜 葉山嘉樹伝」（和泉書院、二〇〇八年）三三〜三四頁。
- 10 徳永直「葉山嘉樹の位置」（注4前掲）九頁。
- 11 徳永直「葉山嘉樹の記憶」（注4前掲）一〇三〜一〇四頁。
- 12 葉山嘉樹「文学的自叙伝…山中独語」（初出：『新潮』一九三六年一月号／引用：『葉山嘉樹全集 第五卷』筑摩書房、一九七六年）一六八・一七一頁。ちなみに、葉山はこのエッセイの中で、自分が所持していたゴリキー短編集は「前田晁氏の訳」であったと回想しているが、正しくは、相馬御風訳『ゴリキー集…短篇六種』（博文館、一九〇九年）だと推測される。
- 13 葉山嘉樹「ゴリキーと僕」（初出：『文学時代』一九三〇年六月号／引用：『葉山嘉樹全集 第六卷』注3前掲）四一五頁。
- 14 徳永直「ゴリキーに関する断片…「私の大学」をとほして」（『文学評論』一九三四年三月号）六〇頁。
- 15 葉山嘉樹『海に生くる人々』（改造社、一九二六年）。引用は、『葉山嘉樹全集 第一卷』（筑摩書房、一九七五年）四九頁。
- 16 徳永直『太陽のない街』（戦旗社、一九二九年）六〇〜六一頁。
- 17 徳永直「島原女」（『新潮』一九三三年九月号）。引用は、『短篇集 冬枯れ』（ナウカ社、一九三五年）一一二頁。
- 18 注14前掲、八三〜八四頁。

- 19 鶴見俊輔『転向研究』（筑摩書房、一九七六年）一〇頁。講演を基にした本稿では通説を紹介したが、「転向」をめぐっては近年さらなる検討が進められている。私も共著者の一人として寄稿した Tenkō: Cultures of Political Conversion in Transwar Japan, Edited by Irena Hayter et al., Routledge, 2021. では、国際的で多角的な視点から「転向」概念の再検討を試みている。
- 20 『読売新聞』一九三七年二月二六日夕刊の二面に、「太陽のない街」其他著作絶版を宣言 徳永直氏が「大転回」の見出しで報じられている。
- 21 葉山嘉樹「改版に際して」（『昭和名作選集 子を護る』新潮社、一九四二年改版）三頁。
- 22 小田切秀雄「解説」（『葉山嘉樹全集 第三巻』（筑摩書房、一九七五年）四三八頁。
- 23 葉山嘉樹『海と山と』（河出書房、一九三九年）。引用は、『葉山全集 第三巻』（注21前掲）七〜八頁。
- 24 徳永直「最初の記憶」（『新潮』一九三八年一〇月号）。引用は、『昭和名作選集 八年制』（新潮社、一九三九年）一六五〜一六六頁。
- 25 小田切秀雄「解説」（『葉山嘉樹全集 第五巻』注12前掲）四六四〜四六五頁。
- 26 徳永直「葉山嘉樹の位置」（注4前掲）一四〜一五頁。
- 27 判沢弘「労働者作家・橋本英吉・山田清三郎・徳永直」（『共同研究転向・中』改訂増補版、平凡社、一九七八年）四八五頁。



葉山嘉樹没80年記念講演会で講演する和田崇九州大学准教授。

付記

- ・引用に際して、「/」は改行、「[中略]」は途中の文章の省略を指し、傍線はすべて引用者による。
- ・本稿の内容の一部は、JSPS 科研費 JP22K00338・JP25K00450の助成を受けた成果を含んでいる。

【資料紹介】

『朗読小説』について

鶴田知也

この夏、九州の農民学校で、プロ文学論の講義をしたが、その折、必要上『セメント樽の中の手紙』を朗読した。同志葉山の小説は、殊にこの作品は極めて朗読に適してゐるので多大の感動を聴講者に与へた。

一態に、我々の持つてゐる作品は、凡てが集会等で朗読されるのに適してゐるとは云へない。多くは、読者個人の眼を通して読まれるような条件のもとに、事実上制作され来つてゐる。作者は文字や文章の構成が持つ視覚的な効果をも多く取入れながら事実上、全大衆に、読者個人の社会性を通じて訴えかけてゐる。これは、正しく誤つた方法ではない。私は只だ、小集会等に於ける朗読——即ち、耳を通しての小説(詩)の必要と価値とを痛感するものである。

では、朗読に適すると云ふ条件は何であらう？

内容的には、恐らく、朗読小説なる特殊の範囲はないと思はれる。只だ、理論的要素の多いものは、読者たる聴衆に、思考上の時間的な不整を来たして面白くないであらう。

量的には、余り長過ぎてはいけない。(勿論作者の技術による所が大きいし、又、集会の性質によつて一律にはいかぬが。)勢々十分か十五分で読み終わる三十枚以下の必要はあらう。

が、何よりも、重要な条件は、朗読に適し同時に聴くに適

した形式技術にあると考へる。

勿論これとて絶対的なものではないが、例へば、翻訳された、アルチバセーフの作品はチエホフの作品よりチエホフはゴーゴリ・ドストイエフスキイより多く聴くに適してゐる。

思ふに、耳は、最も平常の対話にならされてゐるからである。ゴーゴリやドストイエフスキイの諸作に見る如き、巧みな話述体が、或ひは最もこれに適してゐるのではないかとさへ感ぜられるのは、一つの暗示ではあるまいか。

平常の対話に於けるが如き、相手の理解のテムボや、造型的な効果でなく、音楽的な効果、或ひは、耳に甚だまぎらしい漢語や直訳流の福本的用語を用ひない等の考慮が払はれたなら、勿論、話述体に限つたことではない。

以上は、メモに書きつけた簡単な項目を、粗雑に文章化したのに過ぎない。私は、今後、有為な諸作家が、この方面にも留意されんことを希望するものだ。——一九三一・二〇——

【解題】

鶴田知也『朗読小説』について」は、一九三一年一月発行の『文戦』第八卷第一号に掲載された。第二期堺利彦農民労働学校(一九三二年八月、行橋・蓑千太郎経営の精米所二階)における講義「プロレタリア文学論」の報告である。

実は、第二期では、葉山嘉樹が「社会世相批判」を講義する予定だったが、東京一行橋間の旅費一五円を工面することができず、急遽不参加となつた。第二期の「出席学生数最大四十名 最小十五名」(『堺利彦農民労働学校「ニュース」

第四号)の中には葉山の講義に期待を寄せる人々も多数いた  
と思われる。そこで、鶴田知也は窮余の策として「セメント  
樽の中の手紙」を朗読したのである。

四〇〇字原稿用紙七枚半の「セメント樽の中の手紙」の朗  
読が、「多大の感動を聴講者に与へた」のは、第二期堺利彦  
農民労働学校に限ったことではなく、これまで各地で開催さ  
れた葉山嘉樹記念集会でしばしば見られた光景である。

さて、今から二〇年前、池田浩士・前京都大学教授、祖父  
江昭二・和光大学名誉教授(故人)と鼎談「文芸戦線創刊  
八〇周年」に臨んだことがある(『社会学』第二〇号)。

鼎談終了後の懇親会の席上で、池田浩士氏から「堺利彦農  
民労働学校の知識人講師が、聴講者の農民や労働者から学ん  
だものはなかったのか」と質問された。その時、瞬時に脳裏  
に浮かんだのが、この『朗読小説』についてだった。

鶴田知也は、一九五四年の日本農文学会創立前後からNHK  
の農村向けラジオ番組のシナリオを精力的に執筆する。  
「われわれの『農文学』を、農民諸君に、もつと広く行き  
わたらせ、もつと親しまれるものにするために、一人でじつ  
くり読んでもらう文学の外に、集会で朗読され、有線放送で  
流すのに適した文学(『聞く文学』『耳の文学』とよんでおく)  
を書こうではないか」とは、「提案四件(『農文学』第一三号、  
一九五八年六月)の一節である。

鶴田知也が、戦後、こうした「聞く文学」「耳の文学」を  
提唱し、実践(創作)する一つのヒントを得た貴重な体験が、  
第二期堺利彦農民労働学校での「セメント樽の中の手紙」の  
朗読であった。(小正路淑泰)



第二期堺利彦農民労働学校最終日。1931年8月31日。中列中央の背広姿が堺利彦。  
その左後ろが鶴田知也。中列右が鶴田知也の実父・高橋帚太郎。

## 堺利彦顕彰会創立七〇周年記念出版

### 小正路淑泰『葉山嘉樹と鶴田知也―錦陵人物誌』

小正路淑泰『葉山嘉樹と鶴田知也―錦陵人物誌』（花乱社）は、堺利彦顕彰会創立七〇周年、三人の会再編三〇周年の記念出版である。一〇年前の小正路淑泰編『堺利彦―初期社会主義の思想圏』（論創社）に続き、三人に関するこの一〇年間の顕彰と研究の成果を収めた。以下に目次を掲げる。

まえがき―三人の会、この一〇年を振り返る

#### 第I部 葉山嘉樹

第一章 葉山嘉樹の「反権威、虚飾を嫌う精神」を探る

―旧制豊津中学校の歴史と学校文化を手がかりに

第二章 荒畑寒村の葉山嘉樹回顧録と自筆原稿

第三章 広野八郎の「農民学校の夕」回想録

第四章 浅田隆先生の葉山嘉樹研究

#### 第II部 鶴田知也

第五章 鶴田知也と福田新生

第六章 鶴田知也資料紹介

一 「コシヤメイン記」の話／二 打開けた話／三 枯川

先生の「望郷臺」／四 葉山嘉樹さんの偉業／五 『朗読

小説』について／六 『信州おなご』ということ／七 わ

がふるさとは土蜘蛛族と国分寺と／八 火野葦平『糞尿譚』

第七章 鶴田知也と伊藤永之介

―大崎哲人『プロレタリア文学への道』刊行に寄せて

補論一 鶴田勝子資料紹介 田舎育ちのモガ

補論二 大石千代子の火野葦平宛葉書をめぐって

#### 第III部 堺利彦

第八章 堺利彦と現代―平民社一二〇年

第九章 坂本梧桐『見果てぬ夢―堺利彦伝』

―堺利彦の「社会主義」の独自性と可能性

第一〇章 堺利彦の獄中望郷歌

第十一章 鶴田知也「堺利彦先生逝去さる」

―「豊津中学万歳事件」の真相

第十二章 古賀武夫先生の堺利彦研究

補論三 堺利彦資料紹介 豊津中学校の新学風など

#### 第IV部 錦陵人物誌

第十三章 会津の「儒将」秋月悌次郎と旧制豊津中学校

第十四章 明治中期の旧制豊津中学校と野球

第十五章 満州医科大学最後の学長・守中清

補論四 「北大古生物学の巨人」長尾巧

補論五 偉大な「郷土研究者」光畑浩治先輩をしのぶ

あとがき

「あとがき」には、「本書が葉山嘉樹と鶴田知也や堺利彦の思想、文学、運動の現代的意義と豊津の精神的風土の解明、豊津藩校育徳館―旧制豊津中学校の校史研究に少しでも貢献することができれば幸いである」と記した。

四六判、約四〇〇頁、三三二〇円（税込）。

本書の刊行に力強いご支援をいただいた関係各位に深甚なる感謝を申し上げます。（小正路淑泰）